ウクライナ侵攻の宗教的側面　－論考２

 　　 最近では、公のマスコミでも、ロシア正教会とプーチンの「ウクライナ侵攻」との関係を扱う記事が見られるようになりました。ロシアを過去のソビエト連邦：」の時代に戻すという「ルースキー・ミール」（ロシアの世界）が背景にあるのではないかということですが、ただロシアの領土を拡大するという意味ではなく、更に深い宗教的内面が大きく関わっているような気がします。勿論、主義とか、思想とか、経済とか、民族などの要素が国の外交政策を形づくるのですが、今回も私自身の「論考」という形で、宗教的側面からの切り込みで述べさせて頂きますので、その点、ご理解ください。

　　　私はヨーロッパ各地を訪問して気がついたことは、国がそのキリスト教派によって区分されていることです。南はイタリア、フランス、スペイン、ベルギーがカトリック教会ですが、北はベルギーから分離した改革派のオランダです。フランスの上のスイスはカトリックと改革派の緩衝国となり、北に行くとスロベニアから始まりオーストリア、ドイツの南、スロバキア、ハンガリー、ポーランド、そしてリトアニア、ラトビアの南までとカトリック教国が帯状に延びています。ドイツの北側からルター派が始まり、ラトビアの北側とエストニア、北欧３か国となります。チェコは台風の目のようにほとんど無宗派状態。海を越えたイギリスとアイルランドの北側が聖公会、南側がカトリック教会です。フランスの影響でしょう。

　　　それでは問題の東ヨーロッパはどうでしょう。ギリシャの正教に始まり、北マケドニア、ブルガリア、ルーマニア、モルドバ、ウクライナ、ベラルーシとロシアの正教へと縦帯状になっています。かつてのユーゴスラビアはカトリックと正教の緩衝地帯でボスニア紛争が起こり、カトリックのクロアチアと正教のセルビアに分離。ボスニアがその中間地帯となり、南に位置するコソボとアルバニア、モンテネグロはイスラム教国です。このように宗教地図が面と面を接合しながら形状をなしているのです。

注（上記の内、実際に訪れていない国はラトビア、スロバキア、南アイルランド、モンテネグロ、ボスニア、セルビア、モルドバの７か国）

　　　イスラム教でも内部派閥の紛争があるように、キリスト教も教派の分裂、分派を繰り返してきた歴史がありました。それはカトリックとプロテスタントの間で、カトリックと正教の間で。それがアメリカ大陸の発見で、ヨーロッパ西側に位置するカトリック教会とプロテスタントの教会は新しい開拓地へと宣教活動を拡大していきます。ヨーロッパ大陸の南にあるカトリック教会は南アメリカ大陸へ、プロテスタント教会は、諸派も含めて北アメリカ大陸へと宣教活動を延ばして行きますが、乗り遅れたのがまさにヨーロッパの東側に位置する正教会なのです。宣教活動はジョージア、アゼルバイジャン、中央アジアまで。アジアの国々は元々、仏教、ヒンズー教があり、南に下るとイスラム教があり、宣教を広めるのは難しかったと言えます。これ以上、新しい宣教の開拓地がなくなった現在は、他宗教や異宗教とは対立するのではなく、共生していかなければならないのが現在の21世紀です。それをエキュメニカル運動と呼びます。

　　　その三大キリスト教と呼ばれるカトリック教会、プロテスタント教会、正教会はそれぞれ大きな特徴と違いがあります。まずカトリック教会は、全体を統括するのはローマ教皇であり、国境を越えておよそ13億人近くの信徒を有し、一番大きな教派になりました。プロテスタント教会はカトリック教会から分裂しましたが、教派の創始者によって、或いは神学的な違いによって宣教する教派群となりました。たくさんの教派が存在します。彼らの宣教はアジアやアフリカに、世界中に力を注ぎました。そして正教会は、その国に一つの正教会、つまり国家を担う正教会の主教座によって統括され、それぞれの国の正教会が緩い関係で結ばれたビザンチン時代の教会像を引き継ぎ、国民の多くが正教会の信徒でないと常に少数派なのです。しかしローマ主教座は宣教を拡大する中で、他の国のカトリック教会をローマ教皇が頂点に立つことによって統括しました。本来、正教会の立場から言えば、その他の宣教地域を一人の主教座によって統括するのは不自然なことで、他の国の正教会の上に立つことはあり得ないと考えております。

しかしながら、教理上の対立をきっかけにカトリック教会は、11世紀にギリシャ正教会と袂を分かち、世界最大のカトリック教会となりました。正教会から言えば、自分たちの方が本流で、カトリックは1つのローマ主教座が他国の主教座を吞み込んだと考えるでしょう。ギリシャ正教に始まる正教会は、東ヨーロッパの地で、東ローマ帝国と共に宣教を拡大し、トルコのコンスタンチノープル主教座が中心的な役割を果たしてきました。しかし正教は東ヨーロッパの内陸を北へと向かい、海外への宣教を進める機会はありませんでした。その生み出された正教会の中で、ロシア正教会は周辺国に大きな影響力を持つ正教会へと発展しました。ロシア正教会は1億五千万人と言われ、そのロシア正教会の統括下にあったのがベラルーシとウクライナです。

　　　そこで東ヨーロッパに存在する各国の正教会は、ギリシャ寄りなのか、ロシア寄りなのか均衡を保つようになって行きます。その緊張の中で、西側の影響力が強まり、ロシア正教会の存続が危ぶまれるようになったと感じたのが、今回のロシア正教会だったのです。ウクライナには独立した正教会の組織が生まれかかったのですが、公認されず、4年前の2018年にコンスタンチノープル主教座によって、正式にウクライナ正教会の設立を認められました。これにより、ウクライナ国内では、ウクライナ正教会派とロシア正教会派の分裂が起こりはじめ、特にウクライナの東側にはロシア人が大勢いましたので、双方の間に摩擦が起こりました。

　　　この対立には発端は2013年から14年にＥＵ加盟か、ロシア政府下かという政治問題で国内デモ事件が起こる中で、ウクライナ正教会か、ロシア正教会を支持するかの対立が生まれました。これは同じ教派、教会内の管轄の対立でした。ロシア正教会から見れば、今までのウクライナに存在するロシア正教会が、西ヨーロッパの影響力で、ウクライナ正教会によって信徒が奪われてしまったと感じたのが本音でしょう。この事件は、ソチオリンピックもあって、殆ど日本ではマスコミに取り上げられませんでした。この事件によってロシア寄りのヤヌコービッチ大統領が国内デモで退陣した直後、ロシアはクリミアに侵攻しました。その理由はロシア人はロシア語を話し、ロシア正教会の信徒なので、ロシア自治国になるように画策した訳です。今回のウクライナ侵攻は、経済問題ではなく、正教会も西側に奪われてしまうという危機感を覚えたのがロシア正教会を背景にしたプーチンのウクライナ侵攻の動機ではなかったのではないでしょうか。「悲劇だけど、これ以上の選択肢しかなかった」と言うプーチンの思いつめた言葉の真意でしょう。勿論、武力行使する行動はプーチンのＫＧＢ時代に培った本性のようなものでそれは許されるものではありません。しかし動機には民族的な、或いは宗教的な信念なしには尽き動かすことはできないでしょう。

　　　ＹＯＵＴＵＢＥの中に、歴史ミステリーチャンネル「ロシア正教古儀式派教会」という番組が目に留まりました。ロシアには正式なロシア正教会でない、ロシアの風土から生まれた土着のロシアの古儀式派教会があるという解説でした。共産主義の宗教迫害も耐え抜き、その集団から多くのすぐれた政治家を生み出しているという内容で、スターリンもその集団からの出身者であること。プーチンの父祖はそのスターリンの老後生活で彼の料理人をしていた人物であったとも解説しています。前編・後編の番組で述べていますのでご覧ください。プーチンと古儀式派教会との繋がりは確証がないと記していますが、彼は熱心な母親の影響でロシア正教会の洗礼を受けた信徒と言われています。2017年に古儀式派教会の主教コルニーリイ主教と個人的に面談し、その本部の修道院を訪問したことが記事として残されておりこれは本当のようです。

　　　結論として、宗教の教派形成は、お互いに検証しあう意味で大切だと思います。しか　　しながら対立することは本末転倒です。教派の形態は「目に見える教会」ですから完全な姿はありません。そのために、違いを認め合いながら、お互いの教会、教派と交わりを持ち、対話を通して、同じイエス・キリストを信じる者として、共に尊敬と礼儀を尽くして宣教を担う姿勢が大切です。それは「エキュメニカル運動」と呼ばれ、偏見をなくすことです。他宗教にも言えることです。

　　　私は、聖書協会世界連盟の役員を長らくしておりましたので、あらゆるプロテスタント、カトリック、正教会の方々と親しく会話や対話をする機会を得ることができました。それはキリスト教の聖書が全ての教会で同じ旧新約聖書の原典から翻訳され、全ての教会で使われているからです。聖書協会世界連盟は約１４０か国の聖書協会が連帯し、協力し、聖書翻訳と頒布に携わっており、お互いが異なるキリスト教会に所属しながら、民主的な会議制で運営されているからです。また20年間、日本基督協議会のメンバーでもありましたので、様々な意見を持つ方とも対話をすることができました。特に世界平和宗教者会議（WCRP）での役員として参加できたことは、日本の仏教や神道の多様な宗派の方々と対話し、世界平和について学ぶことが、できたことも感謝でした。かいがいの国々の宗教、イスラム教、ヒンズー教、ユダヤ教にも触れることができました。特にイスラム教は生活の隅々まで厳格に、信仰生活をしていることに驚かされます。

　　　私は40年前神学生時代にアメリカの大学でジョン・ヒックの宗教哲学を学ぶ機会を得て、他宗教者と、或いは無神論者であっても、同じ目線で対話する重要さをそこで学びました。それは自分の信じている信仰があるからこそ、そこに立つことができるのです。これからの世界は、この宗教間の問題を正しく取り扱わないと、閉鎖的な宗教組織ほど、誤解と偏見を生み出す危険があることを、最後の結論といたします。未来の世界に平和が訪れますように祈ります。